世界の幸せをカタチにする。
Creating Peace & Happiness for the World
Musashino University
武蔵野大学 学術機関リポジトリ
Musashino University Academic Institutional Repository

武蔵野大学における防災情報に関する研究：その1 大学から提供されている情報の分析

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2022-03-31
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 伊村, 則子
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1779

武蔵野大学における防災情報に関する研究

その１　大学から提供されている情報の分析

A Study on the Disaster Mitigation Information in Musashino University
Part 1　Analysis of Information Offered by the University

伊　村　則　子
Noriko Imura

１　はじめに

地震被害を最小限に抑えるには、市民の防災力向上が重要になる。『首都直下地震対策大綱』では大学を含む事業所は、帰宅困難者対策など自前の対策・準備が求められている。また大学生は生活圏が拡大し、一人暮らしなど生活環境が変化する時期であり、様々な状況に遭遇する可能性が高い。これまで、本研究は大学生に注目し防災知識や対応力がどの程度か、特に自宅から離れた大学で被災した場合に注目し大学生を対象にアンケート調査[1, 2]を行ってきた。本報では、大学から学生に配布されている防災情報を収集し、どのような防災情報が学生に発信されているのか、武蔵野大学の現状を明らかにするとともに他大学の情報と比較し、課題を明らかにした。

２　調査概要

武蔵野大学の場合、大学から学生に対して提供する防災情報は、毎年４月に全学生に配布する『学生手帳』[3]と『学生ハンドブック』[4]によることから、他大学の学生手帳と学生ハンドブックを収集した。調査は2006年５～８月に行い、関東圏14校（玉川大学[5]、法政大学[6]、東京女子大学[7]、津田塾大学[8]、中央大学[9]、女子美術大学[10]、大東文化大学[11]、東京情報大学[12]、専修大学[13]、明海大学[14]、工学院大学[15]、千葉工業大学、東京薬科大学、成蹊大学）の資料を得た。また、比較検討のために、阪神・淡路大震災の被災地域にある大学についても資料を収集し、阪神地区６校（神戸薬科大学[16]、神戸大学[17]、甲南女子大学、神戸女学院大学[18]、甲南大学、関西学院大学[19]）の情報を、現地ヒヤリング調査、または電話による聞き取り調査により入手した。

さらに、参考として東海地震想定地域にある東海地区２校の静岡大学と名古屋大学の資料を対象とした。両大学は学生向け防災情報をそれぞれホームページ[20, 21]により一般公開している。

３　武蔵野大学が提供している防災情報

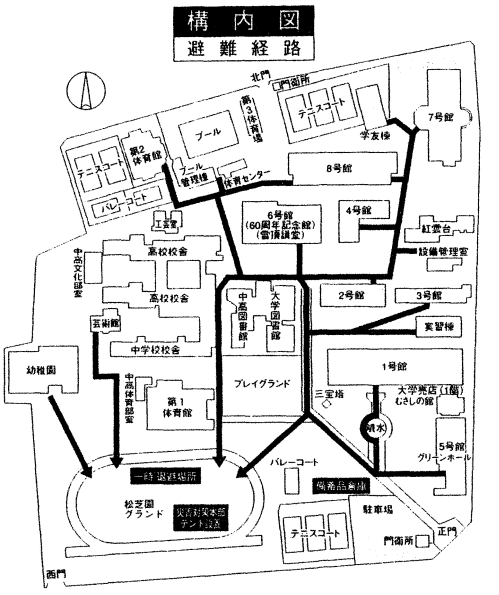
武蔵野大学が学生向けに提供している『学生手帳』[3]と『学生ハンドブック』[4]の防災情報を**図１**、**図２**に示す。この２冊に書かれている内容は一般的な内容が多い。また、両者にあまり違いはなく、共通に記載されている項目には、「避難経路」「災害伝言ダイヤル」などがある。

災害発生時及び警戒宣言が発表された場合の留意事項

1．学内で火災が発生した場合
学内で火災が発生した場合、非常放送により知らせるので、避難標識に従い、直ちに屋外へ避難し消火活動の妨げにならないように、松芝園グランドに集合すること。
避難の際、特に注意すること。
イ．窓の近くにいる学生は、必ず窓を閉めて避難すること。
ロ．静粛に足早に避難すること。(走らないこと)
ハ．煙が充満している個所では、壁や廊下に添ってからだを低くして、口や鼻をハンカチ、タオルなどで塞ぎながら避難すること。
ニ．一度避難したら、絶対に友人を捜しにいったり物を取りに戻らないこと。

2．地震が発生した場合
在宅中または通学途中で地震により交通機関が混乱した場合は、無理に通学しないで自宅で待機するか、自宅に帰ること。
学内にいて地震があった場合は、次のことに留意すること。
イ．火気使用中はガスの元栓を締める等、直ちに火を消し、窓、扉を開け、落下物等から身を守るため机の下などにからだを寄せる。
ロ．あわてて屋外に飛び出さないで、地震がおさまるのを待って、落下物に注意し、速やかに屋外に出る。
ハ．地震がおさまったら友人の様子を確かめて、異常があったら直ちに、災害対策本部（以下「本部」という。）に連絡する。
ニ．屋外にいるときは、屋内に入らないこと。また、一度避難して屋外に出た者も、屋内には入らないこと。建物から離れて安全な場所で待機し、本部の指示に従うこと。

3．警戒宣言が発表された場合
大地震が予測される場合は、政府で決定し、警戒宣言が発表されることになっているが、次の点に留意すること。
イ．通学前に警戒宣言判定者招集の報道があった場合は、判定会の結論が出るまでは自宅で待機すること。
ロ．通学途中で報道があったり、震災に直面した場合は、交通機関の混乱しないうちにできるだけ自宅に帰ること。



災害用伝言ダイヤル171のかけ方
災害発生時(震度６以上の地震など)にはNTTサービスが稼動します。
家族や友人などが被災した場合、安否の確認や連絡などに活用できます。
災害用伝言サービスの開始にはテレビ・ラジオで通知されます。
災害用伝言ダイヤルページ
http://www.ntt-east.co.jp/voiceml/way/pla.html
◆伝言の録音方法
171⇒１(暗証番号を利用する場合は３)
⇒電話番号入力(□□□□)□□-□□□□市外局番を含めて入力
⇒ガイダンス⇒録音(30秒以内)
◆伝言の再生方法
171⇒２(暗証番号を利用する場合は４)
⇒電話番号入力(□□□□)□□-□□□□市外局番を含めて入力
⇒ガイダンス⇒伝言の再生

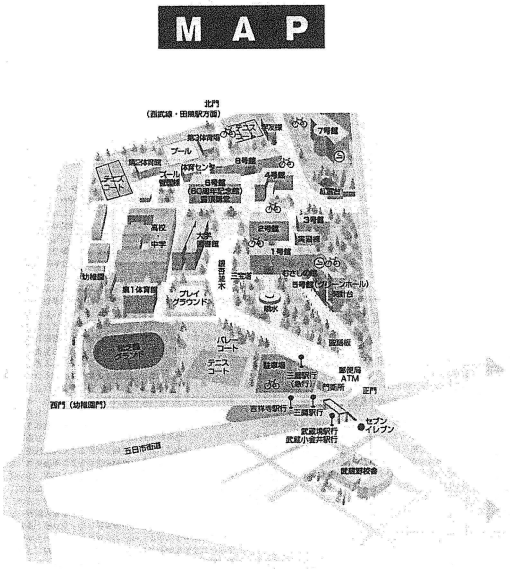
図１　武蔵野大学『学生手帳』[3)]

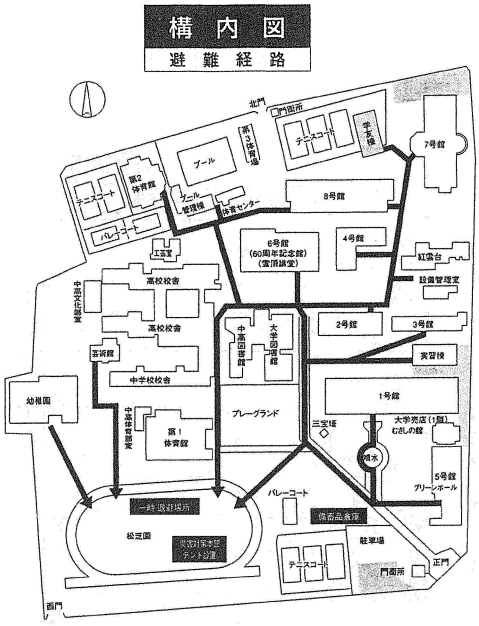
４　大学が提供している防災情報

入手した資料を対象に、大学が提供している防災情報にはどのような内容があるのか、**表１**にまとめた。**表１**中の「①学生ハンドブック」「②学生手帳」は、大学側が学生に配布しかつ防災情報が記載されている場合は「○」を、配布しているが防災情報の記載がない場合は「●」を、配布していない場合は「×」を、不明の場合は空欄とした。次に「提供している防災情報の内容」については、掲載がある場合は「○」を、掲載がない場合は「×」を、不明を空欄とした。

その結果、各大学の提供している状況から、**表１**のように①学内生向けの具体的な情報（５校）、②一般的な情報（11校）、③情報がない（６校）に分類することができる。武蔵野大学が提供している内容をみると、「警戒宣言発令時の行動、在学時の大地震発生時の行動、一時避難場所、災害用伝言ダイヤルの使い方」などであるが、内容は一般的で在学時に被災した場合に役立つ内容とはいえず、②の一般的な防災情報のグループに位置づけられることがわかる。

防災情報を提供する大学で扱いが多い内容は「警戒宣言、学内での地震発生時の行動、地震時の避難の心得」であるが、内容は大学によって大きく異なり、詳細に記載している大学と一般的





4．火災・地震発生時の対応について

(1) 火災が発生した場合は非常放送で連絡しますので、冷静にその指示に従い、あわてず速やかに避難場所に移動してください(P.53避難経路 参照)。

(2) 地震が発生した時は机の下に伏せるなど落下物から身を守り、揺れが落ち着いた時点で速やかに避難場所に移動してください(P.53避難経路 参照)。

(3) 授業で火気を使用している場合は、すぐに消してください。

(4) 非難する際は必ず階段を利用し、エレベーターは絶対に使用しないでください。

災害用伝言ダイヤル171のかけ方

災害発生時(震度6弱以上の地震など)にはNTTサービスが稼働します。家族や友人などが被災した場合、安否の確認や連絡などに活用できます。災害用伝言サービスの開始はテレビ・ラジオで通知されます。

災害用伝言ダイヤルページ

http://www.ntt-east.co.jp/voiceml/way/pla.html

・伝言の録音方法
171→1（暗証番号を利用する場合は3）
→電話番号入力
(0000)00-0000 市外局番を含めて入力
→ガイダンス
→録音(30秒以内)

・伝言の再生方法
171→2（暗証番号を利用する場合は4）
→電話番号入力
(0000)00-0000 市外局番を含めて入力
→ガイダンス
→伝言の再生

図2　武蔵野大学『学生ハンドブック』[4)]

表１　大学から学生への防災情報の提供状況と武蔵野大学の改善課題

提供レベル	防災情報	大学名	配布冊子		提供している防災情報の内容															
					警戒宣言		発生時							事前				教職員		その他
			①学生ハンドブック	②学生手帳	警戒宣言発令時	警戒宣言発令時の社会状況	初期行動	大地震発生時の行動(学内)	避難場所	大地震発生時の行動(学外)	地震時の避難の心得	火災発生時	災害用伝言ダイヤル	地震に対する日常の備え	備蓄	地震時の救護の心得	地震時の基礎知識	東海地震注意報が出たとき	勤務外の時	
②		武蔵野大学	○	○	○	×	×	○	○	×	○	○	○	×	×	×	×	×	×	
①		玉川大学	○		○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	①総合防災訓練 ②防災ボランティア ③学内安否情報 ④教職員非常召集連絡網 ⑤避難・救出に役立つ校舎使用の届出と終業報告の義務付け ⑥台風⑦自然の中での事故 ⑧交通事故⑨身近な事故と犯罪 ⑩海外旅行の安全管理
		津田塾大学	○	×	○	×	×	○	×	○	○	○	×	○	○	×	×	×	×	①建物施設設備(避難器具・EV・非常階段・消火栓・非常放送・公衆電話等) ②気象発表情報 ③地震等の発生時の休講措置 ④消火設備の使用法 ⑤保険制度
		静岡大学			○	○	○	○	○	○	○		×	×	×	○	×	○	○	
		名古屋大学			○	○	○	○	○	×	○		○	○	○	×	○	×	○	
		関西学院大学	○		×	×	○	○	○ (電話ボックスの設置場所有)	×	○	○	×	○	×	×	×	×	×	
②		法政大学	○	×	○	×	×	○	○(広域も)	×	○	○	○	×	×	×	×	×	×	
		東京女子大学	○	×	○	×	×	○	○	×	×	○	×	○	×	×	×	×	×	キャンパスの設置配置図 (非常ベル・消火器・消火栓)
		中央大学	○	●	×	×	×	○	○	×	○	○	×	○		×	×	×	×	消火器の使い方
		女子美術大学	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	①平面図に消火器設置場所・避難器具設置場所記載 ②自動火災報知器、消火器、屋外消火栓、救助袋、防火シャッター等の設置
		大東文化大学	×	○	×	×	×	×	○(避難経路も)	×	×	×	×	×		×	×	×	×	災害緊急連絡カード(連絡先、健康保険、病歴、特異体質、血液型)記入欄
		東京情報大学	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	緊急時の連絡方法、保険
		専修大学	×	○	○	×	×	×	○(広域、避難経路も)	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	①学内テレホンリスト ②専修大学緊急情報TEL
		工学院大学	○		○	×	×	○	○	×	○	×	×	○	×	×	×	×	×	
		神戸薬科大学	○	×	×	×	×	×	○ (避難経路も)	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	防火対策 ①自動火災報知設備②消火栓 ③消火器④避難誘導放送⑤防火シャッター⑥消防隊専用送水管口 ⑦消防水利指定/非常時避難要領
		神戸大学	○		×	×	×	○	×	○	○	○	×	○	×	×	×	×	×	①火災に備えて②風水害に備えて
		神戸女学院大学		×	×	×	○	×	○	×	○	×	×	○	×	×	×	×	×	
③		明海大学	●	×																事故発生～保険金が支払われる迄
		千葉工業大学	●	×																
		東京薬科大学	●	×																
		成蹊大学	●	×																
		甲南女子大学	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	職員に対しての指導のみ
		甲南大学	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
武蔵野大学における改善点					2	1	1	2	–	1	1	–	–	1	3	3	3	3	3	※表2参照

○:配布、防災情報記載有　●:配布、防災情報記載無　空欄:不明

な内容にとどまる大学に分かれた。

①に該当する大学では、学外で大地震が発生した場合の行動や救護の心得、学内の公衆電話の位置などを掲載していた。

5　提供される防災情報の特徴

提供内容を詳細にみると、「警戒宣言」については大学によって項目に差はなく、「在宅中」「通学中・帰宅中」「在学中」「授業措置」に分けられ、9校中、6校が「在学中」5校が「在宅中」「授業措置」と多くの大学で記載がある。なお、警戒宣言地域外にある阪神地域の大学では記載がないことがわかった。

次に、地震発生後の初期行動については、大地震発生時の学内での行動と重なる内容が多く、**表1**に示すようにあえて記載している大学は少なかった。初期行動として書かれている内容はどの大学もほぼ同じで、「身の安全の確保」「火の始末」「出口の確保」であった。初期行動では、二次災害を防ぐ基本的・最低限の内容があげられている。**図3**示すように静岡大学の事例[20]がわかりやすく、地震発生後から時間別にとる行動が、フローチャートで簡潔にまとめられている。

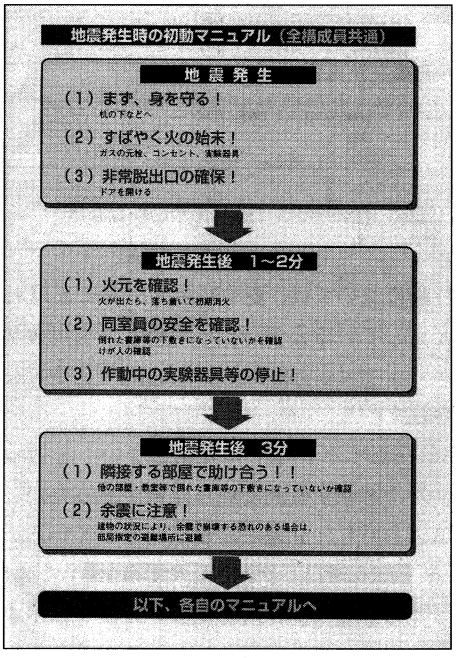


図3　静岡大学『静岡大学の防災対策』[20]

大地震発生時（学内）の行動については、10校中9校が「落下物から身を守る」、8校が「出口の確保」、6校が「火の元を消す」を扱っている。同様にわかりやすい例として**図4**に示すように静岡大学[20]がわかりやすく、場面別に具体的な内容で書かれている。

静岡大学地震防災のしおり

大規模地震に対する教職員の心得

"東海地震"が近づいたら、また、実際に大地震が起こったら、その時本学教職員はどのように対処すべきか、種々の場合について必要な心得と処置を、本学で定めた"地震防災に関して必要な対応策"から抜粋し、順を追って記した。全員がすべきこと、多くの教職員や学生に関係することを番号順に、責任者がすべきことではあるが、全員が知っていた方がよいと思われる事柄をく　>で示してある。

3　突発的に地震が起こったとき

1. 火気、危険薬品を使用中の場合は直ちに安全措置を講じ、部屋出入口の扉を開け、速やかに机の下に身体(とくに頭部)を隠し、落下物・倒壊物から身を守る。
2. 万一火災が発生した場合は、初期消火に努める。
3. 負傷者がいるときは救急処置をとる。必要な場合は応援を求め、救急センター(保健管理センター等)へ担架で負傷者を運ぶ。救急薬品は学科事務室、担架は学部事務室に備え付けてある。
4.
   - 授業中の教官は学生に対し、火気・危険薬品を使用中の時はただちに安全措置を講じ、部屋の出入口の扉を開け、速やかに机の下に身体(とくに頭部)を隠し、落下物・倒壊物・ガラスの破片から身を守るよう指示する。
   - 地震の揺れが収まり次第、部局指定の避難場所に避難させる。
   - 体育館で授業中の教官は、学生に対し、ただちに壁(静岡地区の場合北側の壁)に身を寄せて、落下物に注意するように指示し、地震の揺れが収まり次第、静岡地区はサッカー場の北寄りの所、浜松地区は運動場へ避難させる。
   - 屋外で体育授業中の教官は、学生に対し、速やかに運動場の中央付近(静岡地区のサッカー場の場合は北寄りの所)に身をかがめるよう指示する。
   - 図書館長は、地震の揺れが収まり次第、館内の学生を速やかに指定の避難場所に避難させる。
   - そのほか、構内にいる学生に対しては、速やかに近くの安全な場所に待機し、地震の揺れが収まり次第、最寄の避難場所に避難するよう指示する。
   - 負傷者がいるときは救急措置をとる。必要な場合は応援を求め、救急センター(保健管理センター等)へ担架で負傷者を運ぶ。
5. 地震の揺れがおさまったら、ヘルメット等をかぶり部局指定の避難場所に避難し、互いの確認をする。
6. 自主防災隊長は、対策本部長の指示に基づき、帰宅可能な学生を帰宅させ、帰宅不可能な学生は、対策本部長の指定した避難所に収容する。

図４　静岡大学『静岡大学の防災対策』[20)]

大地震発生時（学外）の行動については、**表１**に示すように玉川大学、津田塾大学、静岡大学、神戸大学の全般的に内容が充実している大学が扱っている。玉川大学では**図５**に示すように「マンション・団地・家屋・アパートでは」「乗り物の中では」「街中では」と場面別に書かれ[5)]、津田塾大学では簡潔にまとめられている。

避難時の心得は、「落下物に注意する」「EV は使用しない」を扱っている大学が多かった。工学院大学では「１階から校舎外に避難する」という記載があったが、これは校舎が新宿の超高層ビル群にあり、地下からの出口もあり、立地が大きく関わっている。

火災発生時については、「早く知らせる」「早く消火する」「早く逃げる」「煙が充満している所では体を低くし、ハンカチ等で口を覆う」の内容が多い。**表１**に示すように特に首都圏の大学で多く書かれ、東海地震想定地域では地震の内容とリンクして書かれていた。

地震に対する日常の備えについては、「家族内での話し合い」「非常口の位置や避難経路の確認」の内容が多い。最も詳細な記述は関西学院大学であり、家具の転倒防止策をとりあげている。

地震時の救護の心得の記述は、玉川大学と静岡大学の２校にとどまり、提供内容の充実度合いがこれによりわかる。

地　震

○昇降口・ロッカー室では、靴箱や収納ロッカーなどの転倒が考えられるので危険です。すばやくその場から離れ、身の安全をはかります。
○校舎の外では、落下物の危険があるので、建物周辺からすばやく離れ、グラウンドや広い場所に出て安全確保をします。

（2）教室の出口を確保
教室の出口に一番近い人は扉を開け、避難路を確保します。

（3）火の元を消す
実験・実習中、ガスやアルコールランプなどを使用している場合、すばやく消火します。また、ガスの、元栓も必ず止めます。

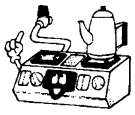
（4）先生の指示に従う
教職員の指示があるまで、勝手に教室から出たりしないようにします。その場で待機し、その間に周辺の状況を確認します（ボヤが人や、火災発生など）。

（5）火が出たらすぐに消火する
初期消火にすばやくあたります。消火器は各階に設置してあります。
ただし、実験室など化学薬品のある教室では、爆発や薬品の飛散などで、状況が急変することがあるので十分注意が必要です。

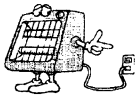
緊急避難時の３つの注意
①安全確保
②状況の把握
（非常放送・係員の指示）
③避難路の選択

■マンション・団地・家屋・アパートでは

（1）落下物から身を守る
戸棚・食器棚・たんすなど家具類の転倒、窓・ガラス戸などの破損による危険があるところから、すばやく離れます。照明器具や鉢などの落下物から身を守るため、テーブルの下にもぐるか座布団やクッションで頭を守ります。



（2）火の元を消す
ガステーブルやガスストーブ・石油ストーブは、転倒する場合があるので、すばやく火を消します。ガス器具は元栓を締め、アイロンなどの電熱器具類は、電源スイッチを切りコンセントを抜きます。風呂釜のガスも忘れず元栓を止めます。



（3）部屋の出口を確保する
玄関・部屋・窓が破損し、外に脱出できなくなる恐れがあるので、扉を開けて出口を必ず確保します。

（4）あわてて外に飛び出さない
日本の家屋は、耐震性に配慮されているので、家の中の方が安全だといわれています。屋外の建物周辺では、瓦やガラス、看板などが落下してきたり、玄関前でブロック塀が倒れ、下じきになるなどの危険性が高くなります。
木造住宅では、1階より2階の方が安全だといわれています。マンション・団地などの鉄筋コンクリートは、よほどの大地震でない限りまず安全です。

（5）出火したらすばやく消火する
火災が起きたら「火事だ！」と、必ず大声で家族や隣近所に知らせます。地震発生後は、消防車はすぐには来られないと考えて、全力で初期消火します。天井まで火があがったら隣近所に知らせ、急いで避難します。

■乗り物の中では

（1）電車
鉄道は地震時には停止信号を表示し、列車は止まるようになっています。車内では、次の機能で安全を確保します。
○急停車するときは、かなりのショックがあります。立っているときはつり皮や支柱などにしっかりつかまり身体をささえます。
○勝手な判断で行動せず、乗務員の指示に従って行動しましょう。
○車両に、小さな子どもやお年人、身体の不自由な人がいるときは、お互いに協力しあって優先して避難させることが必要です。

（2）地下鉄
○走行中の地下鉄は地震を感じた場合、状況によって次の駅まで運行することになっているので、車内放送を注意して聞きます。
○停電になっても非常灯が点灯します。乗務員が運転指令所と連絡をとり状況を判断しますので、指示があるまで決して勝手な行動はしないで待ちます。

（3）車
地震により道路が波打つ感じとなり、急ハンドルを取られ、運転が難しくなります。
○地震を感じたら、ハンドルをしっかり握り、ゆっくりとスピードを落として車を道路の左側に寄せて止めます。
○寄せたらエンジンを止め、鍵はそのままにします。サイドブレーキはしっかりかけて避難します。
○車外に出るときは、まわりに十分注意し、頭をカバンや衣類で保護しながら、徒歩で安全な場所へ移動します。

■街中では

（1）駅・ホーム
地上の駅のホームは、大部分が鉄骨でできています。しかも軽い屋根でできているので、地震で瞬間につぶれる心配はまずありません。
ホームで地震を感じたら、頭上の時刻表や照明器具の落下物から身を守り、架線の切断に注意して、駅員の指示を待って行動してください。
周辺の子ども・老人・身体の不自由な人は優先し、避難誘導に協力しましょう。

（2）商店・ビル街
まず頭上からの落下物に注意します。ガラスの破片・コンクリート・看板・レンガ・タイルなどのさまざまな物が落下してくる危険があります。コートや上着、カバンなどで頭を守りながら、ビルの入口に逃げ込みます。歩道橋の上では、すばやく下に降り、橋から離れるようにします。

（3）地下街
地震のときの地下街の揺れは、地上の建物の半分以下といわれています。火災や浸水・ガス漏れなどがなければ、地上より安全といってもよい場所です。
恐ろしいのは、群衆が暗闇で起こすパニック状態と火災です。
地震によって一時的に停電しても、非常用バッテリーなどの設備で、誘導燈や非常燈がつくので、不安や恐怖に巻き込まれないようにします。また、構造的に安全にできているので、決してあわてないようにします。
地震の際には人々が非常口・出口などに集中し、人的２次災害が起きやすいので、落ち着いて行動します。どこの地下街でも、出入口は60m間隔で設けられています。近い出口の方向を確かめ、避難は駅員や店主などの指示に従うようにします。

地下街の火災は要避難
地震には比較的強い地下街も、一旦火災となると、大変な危険地域となります。地下街の火災は特に、"煙"と"有害ガス"が充満します。パニックに巻き込まれないよう、冷静に出口を見つけ外へ避難するようにします。

（4）デパート・映画館
天井からの看板、装飾品などの落下に注意します。頭をコートやカバンで守るようにします。停電になっても非常燈がつくので、映画館では、まず、椅子と椅子の間に

図５　玉川大学『防災の手引き　いざというときのために』[5)]

６　武蔵野大学における今後の課題

大学が提供している情報の比較より、武蔵野大学の現状をふまえ、先進的な事例を採り入れ、武蔵野大学の改善案を考察した。結果を**表２**に示す。改善案は緊急度合別に、早急に着手すべき課題を「１」、項目として現状にあるが内容を改善した方がよいものに「２」、第２段階の着手でもよいと考えた課題を「３」、現状維持を「－」とした。（なお**表１**の最下段にも併記した。）

表２　武蔵野大学の現状と今後着手すべき課題

		提供している防災情報の内容														
		警戒宣言		発生後							事前				教職員	
○:掲載　×:未掲載		警戒宣言発令時	警戒宣言発令時の社会状況	初期行動	大地震発生時の行動(学内)	避難場所	大地震発生時の行動(学外)	地震時の避難の心得	火災発生時	災害伝言ダイヤル	地震に対する日常の備え	備蓄	地震時の救護の心得	地震の基礎知識	東海地震注意報が出たとき	勤務外の時
武蔵野大学	現状	○	×	×	○	○	×	×	○	○	×	×	×	×	×	×
玉川大学	現状	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○
津田塾大学	現状	○	×	×	○	×	○	○	○	×	○	○	×	×	×	×
静岡大学	現状	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×	○	×	○	○
名古屋大学	現状	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	×	○	×	○
神戸大学	現状	×	×	×	○	×	○	○	○	×	○	×	×	×	×	×
関西学院大学	現状	×	×	○	○	○	×	○	○	×	○	×	×	×	×	×
武蔵野大学における改善点		2	1	1	2	―	1	1	―	―	1	3	3	3	3	3

1:早急に改善すべき課題　2:現状の防災情報で触れられているが、改善したほうがよい課題　3:第2段階に着手しても間に合う課題　―:現状維持

まず、**表２**最上段に示す武蔵野大学の現状は○の内容を掲載しており、「警戒宣言発令時」「避難場所」「災害伝言ダイヤル」などを扱っているが内容は一般的である。

併記した玉川大学、津田塾大学、静岡大学、名古屋大学、神戸大学、関西学院大学は、上述した考察から学内者に対する情報提供が充実している事例であり、中でも静岡大学、名古屋大学、玉川大学は詳しい。

静岡大学の場合は、教職員に対するものが大半を占める。学生に対しては「地震発生時の初動マニュアル」「警戒宣言が発令された場合」「突発的に大地震が発生した場合」について書かれており、詳細は最終的には教職員のページに進むようになっている。教職員への体制がしっかりしており、「勤務外時」「救護の心得」など、こと細かく書かれている。

名古屋大学の場合、「防災訓練」や「地震に対する日常の備え」として家具や器具類の安全対策の方法が絵つきで書かれている。

阪神・淡路大震災被災地域にある大学では、防災情報としては関西学院大学の冊子が充実しており、阪神・淡路大震災の教訓をふまえて冊子を作成していることがわかる。例えば**図６**に示すように、避難場所案内地図（校内地図）[19] には電話ボックスの位置を記載している。これは他の大学にはない工夫であり、発災直後は一般加入電話よりも公衆電話が役に立った経験に基づいたものであるといえ、また現状としても発災直後は、携帯電話はほとんどつながらないと言われていることなどから、採り入れたい先進事例といえる。

首都圏の大学に注目すると、玉川大学の防災教育が進んでいる。附属校園として幼稚園・小学校・中学校・高等学校があり、園児から大学生まで一貫して防災教育が行われ、防災資料もわかりやすいものが作られている。首都圏で次に防災教育が進んでいるのは津田塾大学といえる。玉川大学のように附属校園がないが、しっかりした防災情報が提供されている。

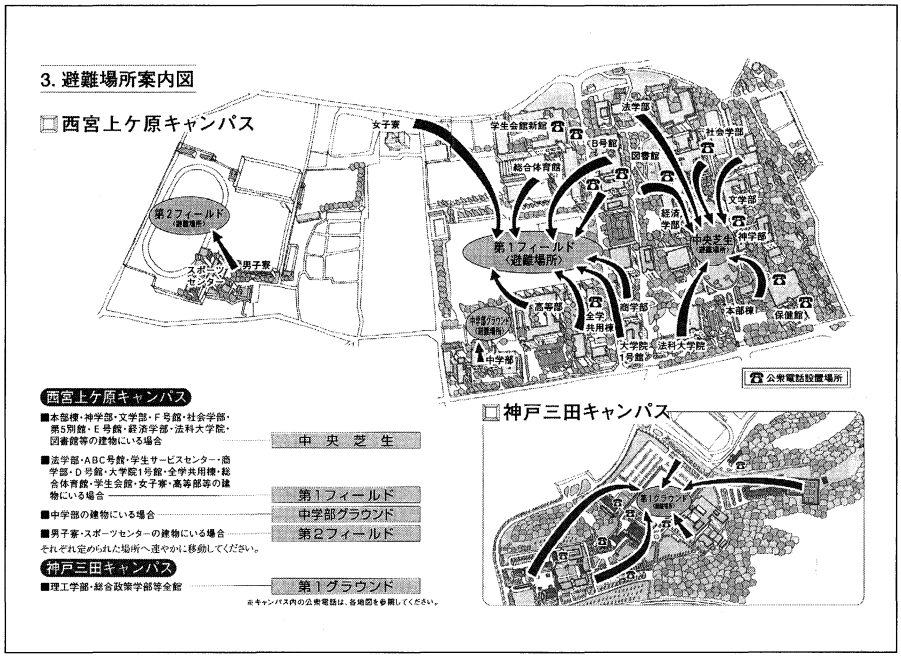


図6　関西学院大学『"いざ"というときのために』[19]

警戒宣言が発令された時の行動として①自宅②通学時③学内④授業再開について書かれている大学が多くみられたが、武蔵野大学の防災情報もこれに類する。

首都圏の大学は「大地震発生時の行動（学外）」まで触れているところは少なく、「大地震発生時の行動（学内）」「火災発生時の行動」の描写にとどまる大学が多い。静岡大学、名古屋大学の東海地震想定地域では、地震発生時の行動の中に火災の内容が盛り込まれている。

以上より、武蔵野大学の今後の課題として「大地震発生時の行動（学内）」では、自分の問題として考えられるように武蔵野大学生向けの具体的な情報とし、学生に身近に感じてもらう必要がある。地震に対する日常の備えでは、武蔵野大学は全く提供していないが、事前準備の大切さは阪神・淡路大震災の事例から明らかであり、また他大学も多く提供しており、重要度が高い。東海地震想定地域の静岡大学や名古屋大学、東京都で防災教育が進んでいる玉川大学を事例に、具体的かつわかりやすく情報を盛り込む工夫が必要と考える。

7　おわりに

武蔵野大学の防災情報と他大学の防災情報を比較し、武蔵野大学には学生向けの防災情報が学生手帳や学生ハンドブックには記載されていたが、内容は一般的な項目・内容であり、防災情報が不足している現状が明らかとなった。他大学の先進的な提供内容から見直しを行ない、武蔵野大学の学生に特化した防災情報の提供が必要であることを示した。次報では、学生を対象とした防災に関するアンケート調査結果と防災啓発マニュアルの提案について述べる予定である。

本論文をまとめるにあたり、終始ご指導戴いた日本女子大学住居学科石川孝重教授に深謝する。また、資料およびアンケート実態調査にご協力戴いた方々に深く感謝する。なお、本研究は西川知恵君、佐藤融紀君の協力を得た。ここに感謝する。

引用文献

1）後藤裕美，石川孝重，伊村則子，吉村敦子：都心キャンパスに通う大学生の地震防災に対する認識と行動に関する研究―その１　アンケート調査の概要と地震防災に関する知識―；―その２　地震・防災に関する意識と体験に注目した分析―，日本建築学会大会学術講演梗概集（都市計画），pp. 441～442；pp. 443～444，2004年８月.
2）山口裕子，久木章江，石川孝重，伊村則子：防災力を高めるための防災教育に関する研究―その７　都心に通う大学生を対象とした地震に対する意識と行動力に関する調査―，日本建築学会大会学術講演梗概集（都市計画），pp. 767～768，2005年９月.
3）武蔵野大学：2006学生手帳，pp. 13～14，2006年度.
4）武蔵野大学学生支援部教務課：2006年（平成18年度）学生ハンドブック文学部 現代社会学部 人間関係学部，p. 19；pp. 52～53，2006年.
5）玉川大学：防災の手引き　いざというときのために，2006年４月１日.
6）法政大学：学生生活ハンドブック 2005，pp. 22～23；p. 45，2005年４月１日.
7）東京女子大学：学生便覧，pp. 42～43；pp. 102～112，2005年度.
8）津田塾大学：2006年度津田塾大学学生ハンドブック，pp. 22～23；pp. 31～34；pp. 46～47；p. 107，2006年４月１日.
9）中央大学学生部：快適なキャンパスライフを送るために 2006，pp. 6～7，2006年４月１日.
10）女子美術大学：女子美手帖 2006，p. 140；pp. 146～149，2006年.
11）大東文化大学学生部：2006年度版大東文化大学学生生活手帳，pp. 96～97；p. 174，平成18年１月31日.
12）東京情報大学教育振興会：Campus Diary 2006，p. 7，平成18年４月１日.
13）専修大学学生部・学生厚生部：2005 CAMPUS DIARY，pp. 10～12；p. 108；p. 140，2005年.
14）明海大学：CAMPUS GUIDE 2006，p. 38，2006年.
15）工学院大学：学生便覧 2003，pp. 111～112，2003年.
16）神戸薬科大学：2005学生の手引き，p. 98；pp. 113～115，2005年.
17）神戸大学：学生生活案内，防災の心得，2006年.
18）神戸女学院大学学生生活支援センター：KOBE COLLEGE HANDBOOK ― 2006，2006年.
19）学校法人　関西学院：“いざ”という時のために 2006緊急災害ハンドブック，2006年４月１日.
20）静岡大学：静岡大学の防災対策，http://www.ipc.shizuoka.ac.jp/~semsato/zisinbukai.htm，2006年１月15日.
21）名古屋大学：地震防災指針，http://www.engg.nagoya-u.ac.jp/library/bousai/f_cont.html，2006年１月16日.